大阪市立北粉浜小学校だより　令和８年１１月４日

「北粉浜の風」

11月号大阪市立北粉浜小学校

◆◇「不思議に思う心」を大切に◇◆

私は、小学校の算数の時間に、大きな数の数え方を習いました。万、億、兆。その先には、京（けい）、垓（がい）、秭（じょ）、穣（じょう）という数があることを、友達が教えてくれました。

「穣」は、数字で表すと、10,000,000,000,000,000,000,000,000,000。「1」の後ろに、0が28個も並びます。「こんなに大きな数を使うことがあるのだろうか」と、不思議に思ったことを覚えています。ところが最近、人間の体をつくる原子の数が、約７穣個にもなると知りました。小学生の頃には、使うことなどないだろうと思っていた大きな数が、私たちの体の中にあるのです。

今年のノーベル化学賞に、硲合憲三（そあい・けんそう）さんが選ばれました。（フランスのアンリ・カガンさんとの共同受賞）硲合さんは、小学生の頃、友達とトンボを捕まえに行ったそうです。友達がトンボを追いかける中、硲合さんは、じっとトンボを見つめていました。

「なんで、ここに止まっているんだろう。」そんなふうに、不思議に思っていたそうです。

大人になった硲合さんは、生命を形づくる分子の不思議に迫る研究に取り組みました。分子には、右手と左手のように、互いに鏡に映した関係にあるものがあります。長い間、科学者たちは、こうした二つの分子が、どのようにして一方に偏って増えるのかという謎に取り組んできました。

硲合さんは、分子をつくる反応で生まれた分子そのものが、触媒となって、同じ形の分子をさらに生み出すという仕組みを発見しました。つまり、ほんのわずかな違いがきっかけとなり、一方の形の分子が次々と増えていくのです。この画期的な発見は、「不斉自己触媒反応」と呼ばれています。生命を形づくる分子が、なぜ一方の形に偏っているのか。その謎を解き明かす手がかりとなる、重要な発見でした。

北粉浜小学校の子ども達も、日々の生活の中で、不思議に思うことがたくさんあることでしょう。調べたり、人に聞いたりしても、すぐには答えが見つからないこともあると思います。また、一つの疑問が解決しても、そこから新たな疑問が生まれることもあるでしょう。

「なぜだろう」「どうしてだろう」と考え続けることは、自分自身を成長させ、新たな発見へとつながっていきます。子どもたちが抱く素朴な疑問や、不思議に思う心を大切にしながら、一人ひとりの探究心を育む教育を進めてまいりたいと考えております。